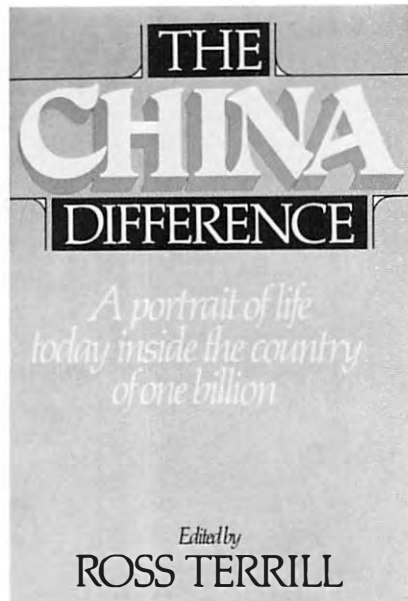




米書レビュー



THE CHINA DIFFERENCE

A Portrait of Life Today Inside the Country of One Billion.

Ed. by Ross Terrill.

Harper & Row. 335p.

中国の異質性

10億人の国の生活 (仮題)

ロス・テリル編

評者 中嶋嶺雄 (東京外国語大学教授・現代中国学)

この秋に建国30周年を迎える中国は、いま巨大な変化のなかにある。それは要するに「毛沢東思想」を建国の理念としてきたこの国にとっての未曾有の政治的・社会的転換であるだけに、未来への可能性とともに、そこに含まれている矛盾もまた大きい。この両義性のただなかであって、中国はいま歴史的な旋回を遂げつつ蠕めいている。

今日の中国の国家目標である「四つの現代化」の問題を考えてみても、実際には、膨大な労働人口の雇用問題ともからんで、現代化=機械化=省力化というわけには簡単にはゆかないことも自明であり、中国は結局、われわれが考える現代化=近代化の概念とは根本的に異なった価値感ないしは世界観において、この国家目標を実現しようとしてゆくのではなからうか。

こうした中国をアメリカの側から見ると

その価値感ないしは世界観の違いは、なお一層大きいものとすると本書の編者ロス・テリルは考えている。そのことは、編者が冒頭で、欧米の中国認識の陥穽を嘗の万能性にたいするナイフとフォークの限定性との違いによって説明しようとしていることにも示されている。だが、いうまでもなく嘗は、われわれ日本人を含む東アジア人に共通のものであるので、このたとえは、厳密には普遍性を欠くようにも思われる。アメリカと中国という視座に日本と中国という視座をオーバー・ラップさせたとき、しばしば日中関係にこそ文化の共通性を越えた異質性が目立ち、かえって米中関係のなかに文化の異質性を越えた共通性を見出し得る日本人の立場から考えると、本書のモチーフには、必ずしも同意できない。

だが、本書は、そもそも、米中接近以来7年を過ぎたアメリカ国民が、ますます拡大しつつある中国との接触に備えて中国についての従来の単純化された画一的なイメージを是正し、今日の中国をより深く知るための指針として編まれたものであり、文化的・イデオロギイ的・政治的な障壁を超えて中国を理解するためには、なによりも価値感 (values、つまりフランス語のメンタリテ mentalité、そして中国語にもっとも適当な語を求めると、shih-chieh kuan <世界観> だと編者はいう) の違いをさまざまに分野で探究しなければならないとの前提から成り立っている。この書名が選ばれたゆえんであろう。

本書は、もともと民間の学術団体であるアジア協会中国部会 (the China Council of the Asia Society) の中国的価値感と中国革命にかんする研究プロジェクトに基づくものであり、いずれも訪中体験もしくは中国での生活体験をもつ16名の中国専門家が、編者の序につづいて「中国の心」、「伝統と変革」、「日常生活」、「国家の手さばき」、「文化」の5章をそれぞれのテーマに従って分担執筆したものである。16名の専門家としては、1907年生まれのリョン・K・フェアバンクのような著名な碩学から、1952年生れの中国系アメリカ人で70年代初頭に中華人民共和国成立後最初のアメリカ人学生として北京大学に留学したエリカ・ジェンにいたるまで代的にも多様な筆者が関わっている。それだけに、本書は、アメリカの現代中国研究の1つの断面を知るための見本としては、大変に便利なものであるが、一方、様々な主張が個々別別になされていて、本書全体が統一的中

国的価値感を教示しているものではない。

こうした16名の筆者によるオムニバス方式の本書の内容をここでいちいち紹介する余裕はないが、編者のテリルは、つい最近アメリカ国籍を取得したオーストラリア出身の中国研究者で、最近もしばしば訪中してそのジャーナリスティックな活躍で知られ、現在はハーバード大学東アジア・センターの Research Associate である。編者は、中国の現状を全面的に否定するシモン・レイ (『中国の影 Chinese Shadow』の著者で、現在オーストラリア国立大学に籍を置くベルギー生れの中国研究者) の立場と全面肯定のハン・スーイン (映画『慕情』の原作者) の立場をともに排し、ヒューマニスティックな立場から中国的価値感を重視するのだと主張し、同時に中国にとっては個人的ではなく集団的な道徳的意味の実在がより重要だと見做して、マルクス主義といっても、民族主義的なマルクス主義が今後ますます効用をもつものと考えている。

この点でも『李大釗と中国マルクス主義の起源』の著者として知られるウィスコンシン大学のモリス・メイスナーは、中国の近代化における毛沢東主義の貢献を高く評価している。毛沢東主義は政治的混乱にもかかわらず、経済的な成功をもたらし、毛以後の指導者も現代化のために毛沢東主義を必要とするだろうという見方は、中国の民心がその政治的混乱以上に経済的失敗のゆえに「毛沢東思想」を離れ、すでに非毛沢東化が著しく進行しつつある今日、妥当とは思われない。

本書においては、中国の政治的自己表現が伝統的価値感により多く影響されるであろうと見做すフェアバンク教授の見解や芸術に見る伝統の継続性を説くマイケル・サリヴァンの見方が、中国における宗教 (儒教、仏教、道教、それにイスラム教とキリスト教を含む) 上の価値感の喪失が社会の調和的發展を阻害していると思做すホルムズ・ウェルシュの見解とともに、やはり説得的である。

なお、本書では『江青同志』で話題を集めたロクサーヌ・ウィトケ女史が中国の演劇を担当しているが、かつての江青夫人への熟っぽい思い入れからのしらけた“転向”のあとが見えるだけで精彩がない。

総じて本書がアメリカの中国研究の高い水準を示すというにはどうも不適當でありむしろ、その多くが文化大革命に憑かれたアメリカの若手・中堅の中国研究者の停滞ぶりを示す結果になっている。

アメリカ社会と家族(上) 激動の60年代が残したもの	ジョゼフ・フェザーストーン	2	あの“60年代”を襲った騒乱が静まりかえったいま社会を改革せよと叫んだ当時の若者たちは いま何に生きているのか。家族観の変化にメスを入れる。
米中関係の歴史と今後	ロス・テリル	16	中国をキリスト教化し民主化するのがアメリカの使命だとした第2次大戦前から 米中正常化までの軌跡をたどり 両国関係が世界に及ぼす影響を分析。
南北問題 4つの意見 南北の互恵的な協力を	ジェームズ・グラント	26	いまの開発パターンでは 貧しい国の基本的な要求を満たすことはできない。南北協力関係への提言。
開発政策のあり方	レスター・E・ゴードン	28	これまでの高テクノロジー型で都市中心型の援助形式を改めて もっと農村指向型のものにすべきだ。
国際商品協定の課題	スティーブン・D・コーエン	32	南北対話の懸案に商品協定がある。1次産品の価格の安定を旨とした国際協定の可能性と限界をつく。
開発途上国の輸入制限と輸出	I・M・D・リトル	35	経済が開放的なら それだけ所得と成長率も高くなる。多くの途上国が貿易制限をするのは なぜか。
空から見たアメリカ		40	航空写真家ガースターが 小型機でアメリカ各地を訪ね 眼下の風景をカメラにおさめた。思わず息をのむ幾何学模様やメカニカルな美をカラーでみる。
非凡な物語作家 アイザック・バシュビス・シンガー	アービング・ハウ	50	ポーランド系ユダヤ人の文化的伝統に根ざして人間の普遍的な状況を描写したことによって 1978年度ノーベル文学賞を受けたシンガーの世界を訪ねる。
現代に生きる作家として ノーベル賞受賞講演から	アイザック・バシュビス・シンガー	55	暗闇をさまよう人間を救うのは詩人ではないのか。
米外交のなかの人権思想	ケネス・トンプソン	56	バージニア大学で開かれた人権と外交をめぐる会議でケナンやモーゲンソーが発表した意見を中心に建国以来のアメリカ政治のなかに道徳の意識を探る。
国際通貨体制の安定をめぐるって	ヘンリー・C・ウォリック	70	いま世界的に起こっている“非同期的な景気循環”は 景気拡大を長引かせる効果を発揮したけれども その一方で国際通貨体制の安定をゆるがしている。
東京サミットを評価する	ユーージン・ブレイク	74	第2のエネルギー危機への引き金となったOPECの値上げ決定と たまたま同じ時期に開かれた今年6月の東京サミットの残した成果と課題を考える。
米書レビュー	内山秀夫 中嶋徳雄 並木信義 坂下 昇		大統領選挙における選択と残響 中国の異質性 アメリカの社会階層 喜劇の安らぎ